

2020 年度秋学期修士論文・課題研究テーマ一覧

2020 年度秋学期において、修士論文・課題研究を提出し、修了が認定された修了生について、氏名と研究テーマを以下に示します。

氏 名：山咲 真梨子

題 目：人事異動が個人の職業的アイデンティティ形成に与える影響—大学図書館職員
の業務経験に着目して—

梗 概：日本の大学において大学図書館職員として業務を経験したことのある個人を対象に、人事異動の経験によってどのような影響を受け、どのような職業的アイデンティティを形成するのかについてインタビュー調査をして質的な分析を行った。人事異動は正の影響と負の影響の両方があることが明らかになり、様々な過程を経て、職業的アイデンティティを形成できる場合とそうでない場合があること、自己の業務選択について自律性がないことに問題があることが分かった。結果を踏まえて、組織として人事異動の効果を最大限に活かし、負の側面を最小限にする仕組みづくりについての提言を行った。

氏 名：中島 晴子

題 目：日本における神学教育のためのコレクション・マネジメント

—博士論文引用文献の所蔵調査を基に—

梗 概：日本では私立大学でしか学ぶことのできない神学に関わる資料について、神学の博士論文の引用文献をリスト化し、その国内所蔵状況を調査した。またその結果から、希少な資料や、洋書が多いこと、国内の神学教育を行う私立大学が所蔵していることが多いことが明らかになった。今後の神学教育を支えていくためには、関連する私立大学図書館が協力し、日本においては希少な神学教育のための資料の、散逸を防ぎ、長く保存していくためのコレクション・マネジメントをしていかねばならないという提

言を行った。

氏 名：久保山 健

題 目：ウェブスケール・ディスカバリー
(WSD) 利用者の利用状況と認識
—インタビュー調査による探索的研究

梗 概：本論文は、ディスカバリーサービスとも呼ばれ、多様な学術情報を一括して検索できるウェブスケール・ディスカバリー (WSD) の利用経験者をインタビュー調査し、WSD の利用要因や利用状況、WSD に対する認識はどのようなものかを明らかにすることを目的とする。本調査の対象者は WSD を「補完的に」「幅広く」利用する傾向があり、「幅広さ」を好む傾向があった。「検索結果が多すぎて使いにくい」といったデメリットとされることは、大きな問題として捉えておらず、許容する傾向があった。WSD が「学部生向け・初学者向け」と言われることについては、6 年制学部卒業生および大学院生以上の対象者から否定的な発言があり、その考えに疑問を投げかける結果となった。

氏 名：秋田 隼一

題 目：ミドルマネージャーの行動特性・働き方が中小規模組織のワーク・ライフ・バランス施策やワーク・ライフ・バランス支援文化創出に及ぼす影響

梗 概：本稿では、日本型雇用慣行の 1 つであるメンバーシップ型雇用の職場においては、WLB 施策利用にあたって、職場内の従業員、特にミドルマネージャーの行動特性や働き方の影響を受けやすいという想定のもと、「管理職の働き方とワーク・ライフ・バランスに関する

調査, 2009」(佐藤博樹、武石恵美子)の個票データを使用し、ミドルマネージャーの行動特性や働き方が組織のWLBを支援する文化や部下のWLB施策利用に与える影響を推定した。そして、その推定結果をもとに、WLB施策の利用度を高める方策や企業規模によるWLB施策利用格差の是正のための方策を検討した。

氏名：前田 健志

題目：住民による社会教育施設建設における計画決定プロセスの民主化とEBPM実現への挑戦
—公園への美術館建設反対と図書館設計への市民参画の参与観察および実現したソーシャルイノベーション—

梗概：枚方市香里ヶ丘で住民に隠されたまま決まった「公園の緑を減らす美術館建設」に反対運動が生じた。2年近く展開され市長交代に至り撤回されたが、住民は案件決定後の変更の困難さを痛感し、続く図書館改築では行政に先んじて動いた。透明性と公開性を担保しつつ僅か1年余に市内外の6館の見学・6つの講演会・2つのワークショップと専門家の助力により根拠ある意見集約を行った。担当部局との対話を積極的に行った結果、内容と民意の集約方法について住民の意向が取り入れられた。同様に根拠ある意見集約を行った粕江と吉野川可動堰の運動と比較し、後者で顕著な「伝える力・巻き込む力」を、理論と感性の両者及び体験に大きな効果があったと考察した。

氏名：氏名：松元 美抄

題目：くらしとなりわいと文化が調和したまちづくり
—姉小路界隈を考える会の「おぼんざい手帳」の実践を通して—

梗概：本研究は、京都市中京区にある姉小路界隈におけるまちづくり活動を社会実験場所とし「姉小路界隈を考える会」のこれまでの25年間の活動を振り返り、これからの会の歩み・ビジョンとして『暮らし』と『なりわい』と『文化』のバランスを育むまち姉小路界隈の実現を目指していくにあたり、今までどちらかというと男性や専門家中心で進められてきたまちづくり活動において不足している地域の住民、特に女性たちの参加を高めること、またどのよう

に女性の参加を高めるかという方法論を探ることを目的とした。女性たちが中心的に担ってきた「おぼんざい」という地域の食文化に着目し、いかに地域で女性を主役にした活動を展開していけるか、社会実験を通して検証した。

氏名：谷合 佳代子

題目：MLA融合型図書館におけるアーカイブズの典拠データ
—RiCによる採録基準の策定—

梗概：図書館の中のアーカイブズ(文書資料)の組織化と図書館資料との連携活用のために、典拠データ作成のための記述基準を策定するのが本論文の目的である。その際に、アーカイブズのデータについては図書館目録中に記載するのではなく、RiC(Records in Contexts)という図書館界の新たな国際標準に準拠する。これまで図書館の中のアーカイブズの整理が困難だったのは、日本国内規則が存在しないことがその大きな原因であった。本研究の結果、日本国内で適用できる典拠データ作成のための記述規則が策定できたので、図書館資料とアーカイブズが典拠データを共有することによって統合検索が進むことが期待できる。

氏名：東森 康子

題目：職員の仕事に対する意欲向上と職場の業務課題達成とを両立させるための中間管理職の役割について
—地域包括支援センター管理者を素材とした実証研究—

梗概：本研究の目的は、職員が働こうとの意欲を感じられるようにすること(職員が意欲を感じるにより、結果として離職を予防することになると考えて)と、併せて、職場の業務課題を達成していくことを両立させるためには、どのような方策があるか、そのためにセンター長が果たす役割とは何かとの問題意識をふまえ、日々の業務で実践しているコミュニケーション手段としての「会議」に着目し、その実践を総合科学的研究的に検証することを通じて、事業所や職場レベルで対応可能なマネジメントによる対策を見いだすことである。社会実験の結果、コミュニケーション手段としての会議は、チームワーク形成の手段として活用することに有効なこと、リーダーシップ機能の課題達成機

能及び人間関係機能のそれぞれにおいて有効だとする結論に得、「会議」を活用することは、職場レベルで対応可能なマネジメント対策である可能性を見いだした。

氏名：村井 拓人

題目：アート思考ワークショップの創造性に関する実践的研究

梗概：本研究において、アーティスト活動は人を幸福にする効果があるのではないか。アーティストがアート作品を生み出す上で用いられる暗黙知を形式知にできないか。それを基に開発した Workshop は人の創造性、行動変容度、幸福度を向上させるのではないかと考え、アーティストへのインタビュー調査を実施したところ、アーティスト活動が年齢や肩書に左右されず幸福度を向上させる効果が確認された。さらにアーティストがアート作品を創り出す上で用いる暗黙知を Art Thinking Theory として形式知化し、それを基に開発した Artist Experience Workshop の実践を通して、参加者の創造性、行動変容度、幸福度の向上効果を年代別に分析した結果、調査尺度の有意差が 40 代をピークに逆 V 字型を描くことが確認された。

氏名：中田 典子

題目：子どもの非認知能力向上を主目的とした食育プログラムの実証的研究
—福井県小浜市が実施する子ども料理教室を例に—

梗概：本研究では、小浜市で実施されている幼児の料理教室を研究対象とし、「小集団による料理の体験によって、子どもの非認知能力が向上する」という仮説の検証を行った。

社会実験では、料理のプロセスにおいて、子どもが獲得するコンピテンシーと、その獲得のために必要な事柄 43 項目を明確にし、評価や獲得率を数値化した。その結果、被験者である子どもも全てに、非認知能力の向上を中心とした好ましい変容があり、仮説の成立に加え、実験後の定性調査からは、保護者にも好ましい変容が確認できた。また、当該プログラムを汎用的なものにするため、社会実験のレシピや運営スキーム、運営上重要な 11 項目を「イレブンポイント」として写真とともに紹介した。

氏名：谷山 昌栄

題目：ボランティア組織におけるマネジメント研究

梗概：本研究の目的は、社会課題先進国である日本において社会貢献を通じて相互扶助の精神を根付かせるものとして、誰でもがボランティアを継続して続けることができるためにボランティアマネジメントの可能性を探ることである。仕事とは違い金銭の報酬がないボランティアにおいては活動を継続することが課題である。すぐにやめてしまう人を少なくするために、ボランティア同士のつながりや普段の活動に対してやりがいを感じやすくする仕組みをマネジメントに取り入れることですぐに活動をやめてしまう人を減らすという課題を解決することができた。

氏名：若狭 由美

題目：フラワーエッセンスを用いた糖尿病患者の心理的ケアおよび治療効果に関する実践的研究

梗概：我が国には 1000 万人の糖尿病患者が存在し、その問題は国家喫緊の課題といわれて久しい。国や地方行政の糖尿病対策について調査し、次に医療や当事者の現状とその課題を明らかにしたところ、糖尿病重症化は糖尿病性ストレスと呼ばれる糖尿病患者独特のストレスの存在が一因であることがわかった。これに対してフラワーエッセンスを用いる実験を行なった結果、患者の心理負担の軽減、糖尿病の改善にも繋がった。身体の健康には精神的な健康が不可欠であり、個人の健康や幸せが健全な社会の構築に貢献するという理解を促進する概念として、Social Health Innovation を掲げた。

氏名：山際 史子

題目：学校図書館の校舎内配置が利用に与える影響

梗概：本研究の目的は、学校図書館の校舎内配置を調べ、それがどう利用されているかを明らかにするものである。まず 2 章では文部科学省の発行物等から、国が学校図書館にどうあるべきだと考えているかを調べる。3 章ではアンケート調査を実施し、配置と利用がどのように関係しているのかを明らかにする。第 4 章では半構造化インタビュー調査を実施し、教員や学

校司書による意識や、学校図書館の利用の仕方の実態を明らかにし、その結果①学校図書館が動線上にある、②学校図書館を授業で利用する、③教員間で働きかけがある、④学校の一部としての理解、⑤居場所としての図書館、という5つのコードを抽出した。そして第5章で学校図書館の校舎内配置が①学校図書館が動線上と②学校図書館を授業で利用するとの関係が特に強いと考えられることを明らかにした。

氏名：浅井 清美

題目：地域から孤立しがちな施設とその地域との交流に「いけばな療法」が果たす役割
—宇治市での「いけばな街道」の実践から—

梗概：本研究の目的は、「いけばな療法」によるソーシャル・イノベーションの地域拡大モデルの手法を宇治市の事例から分析することである。まず「いけばな療法」という非薬物療法の効果や高齢者の地域交流の意義について、先行研究に基づき検証した。そして宇治地域での「いけばな療法」と「いけばな街道」の展開における仮説を考案し、その社会実験の実施、検証、分析を行った。その結果、「いけばな療法」による社会参加拡大モデル「いけばな街道」は、本概念が知られていない、実践経験もない宇治市地域において、認知症者の社会参加モデルとして通用することが明らかになり、社会的包摂を実現するコミュニティ形成の方法を提供する可能性がある。

氏名：佐藤 百合香

題目：自律性と役割の明確さがワーク・エンゲイジメントに及ぼす影響
—従業員専門性・スキルの観点から—

梗概：本研究は、従業員個人が自らの仕事をどのように受け止めているのかに着目し、ワーク・エンゲイジメントを高める仕事の資源である自律性および役割の明確さの負の相互作用を検討するものである。仕事の資源は、仕事の要求からくる悪影響を緩衝し、さらにワーク・エンゲイジメントも高めることが、基本となる理論的枠組みである JD-R モデル

において想定されている。しかし、いくつかの先行研究では、この仕事の資源である自律性が、逆に仕事の要求としてワーク・エンゲイジメントを低める可能性が報告されている。そこで、この自律性の悪影響を緩衝するための仕事の資源として、役割の明確さに着目し、役割の明確さが低い場合における自律性がワーク・エンゲイジメントを低めるのかどうかの分析、および考察を行った。

氏名：藤本 秋

題目：日本の伝統文化が直面する継承問題の構造と解決に関する政策学的考察
—茶道の継承を事例に—

梗概：本稿は現在茶道が直面している継承問題の構造を明らかにし、その解決策を政策学の視座で捉え、考察することが目的である。以上のような目的を達成する上で、先行研究、文化庁によるアンケート調査、社会生活基本調査を用いた分析を行った。その結果、茶道は現在「会員数の減少」「流派自身の発信力不足」「行政との連携不足」という課題があることを明らかにした。これらの課題を踏まえ、茶道の普及・振興に関わる活動を行う NPO として「茶道キャラバン喫茶去」の事例を分析し、NPO が情報発信力に乏しい茶道の流派、流派に対して従来の法制度に基づいた支援を行っていない行政の役割を補完し、茶道の継承を担う存在であることを示した。

氏名：藤本 慎介

題目：ニュータウンにおける内発的発展に関する一考察
—滋賀県大津市仰木の里学区を事例に—

梗概：近代的発展からの解放のための内発的発展論は「総論賛成・各論不在」の現状に陥っている。本論では、それを乗り越えるための一視点としてニュータウンにおける内発的発展を検討する。ニュータウンにおいても内発的発展が起こりうるのか、もしそうであればどのような条件が必要なのかを滋賀県大津市仰木の里学区でのフィールドワークから考察した。本論を通して「住民の力・組織の力・場の力・地域運営力・外部の力」という五つの条件がニュータウンにおける内発的発展には不可欠であることを明らかにした。各論不在脱却のために、「内

発的ニュータウン発展論」という新たな理論構築の可能性を示すことができた。

氏名：郭 詩穎

題目：国際会議の誘致に関わる課題と今後の取り組みの方向性

—京都市と西安市を事例として—

梗概：本研究の目的は、MICE開催による経済的・社会的効果を把握し、日本と中国で発表されたMICE誘致に関する政策を整理する上で、京都市（日本）と西安市（中国）を事例として考察することで、国際会議の誘致に関わる課題と今後の取り組みの方向性を明らかにすることであった。研究の結果として、大学はコンベンション施設として機能を強化すること、大学との情報を共有する仕組みを構築すること、大学がカリキュラムを開発、MICE分野に携わる人材を育成することを今後の国際会議の誘致の取り組みのとして提言する。

氏名：石田 紗彩

題目：ヨガを用いた意識・行動変容に関する実証的研究

梗概：本研究の目的は、持続可能な個人及び社会環境を両立させる手法を検討することである。現代社会における諸問題の根本的な原因が「一人ひとりの在り方」にあるという立場に立脚し、レジリエンスや共感性といった個人々の能力を向上させることがサステナブルな個人と社会の形成に繋がるという仮説のもと研究を行なった。そしてその手段として「ヨガ」に着目し、社会実験「ヨガ×サステナブルワークショップ」を実施し、ヨガを行うことにより個人々の意識・行動がどのように変化し、その変容がサステナブルな個人と社会を推進していく糸口となり得るのかを検証した。分析の結果、ヨガの実践が持続可能な個人及び社会環境を両立させる手段となる可能性が高いということが分かった。

氏名：伊藤 響

題目：学校図書館の地域開放および共同利用図書館の有効性

梗概：一般市民が学校図書館を利用できる枠組みとして、学校図書館の地域開放と共同利用図書館がある。学校図書館の地域開放とは、学

校図書館法の定義する児童・生徒や教員以外の人々に対し、学校図書館を利用させることである。一方共同利用図書館は、学校図書館と公共利用図書館の両方の機能を果たすよう、一元化された図書館である。本研究は、学校図書館の地域開放及び共同利用図書館の実態を調査し、学校教育における有効性を検証した探索的研究である。アンケートとインタビュー調査によって、「学校と地域の連携強化」「児童の読書推進」「蔵書の増加」「レファレンス機能の強化」「公共図書館利用方法の習得」の5つの観点から有効性について結論を得た。

氏名：上林 優真

題目：ソーシャル・インパクト評価の理論と実際

梗概：実践家の社会的価値の評価に貢献するソーシャル・インパクト評価は、その導入に際して混乱をもたらしている。それは、民間部門と公共部門という異なる2つの側面から出現・発展したためである。その混乱を乗り越えるための視座として、介入の効果を反映する評価を検討する必要がある。本稿では、ソーシャル・インパクト評価の最先端であるソーシャル・インパクト・ボンド（SIB）に着目し、さまよえる評価の実態を明らかにした。ソーシャル・インパクト評価の理論的検討と、事例分析を通じた実際の考察という2つの視点から、ソーシャル・インパクト評価でのプログラム評価の導入という、社会的価値のジレンマを解消するための可能性が開かれた。

氏名：木澤 万絵

題目：NPO法人による演劇公演と地域資源の保全

兵庫県加古郡稲美町における事例を中心に

梗概：本稿はため池数が日本一である兵庫県において実施されているため池保全に関する劇団活動を通じ、文化芸術活動、特に子どもを対象とした環境教育活動が地域活性化の観点からどのような効果を生じさせるかについて検討した。

ため池には農業以外の多面的機能があるが、農業人口減少などもあり、ため池管理の知識や文化及び歴史の承継が十分でないという課題が

ある。

ため池の意義や課題を劇で伝えることは次世代を担う子ども分かりやすく伝える効果があるだけでなく、子ども以外の世代も巻き込み世代を超えた効果があることが判明した。また、地域固有の資源として地域の誇りとして認識されて地域活性化に繋がる効果があった。

氏名：水野 璃名人

題目：地域おこしとしての農村民泊事業がもたらす社会的効果

—和束町を中心とした山城地域の農泊事業—

梗概：本研究では、山城地域の農泊事業の実践について調査を行い、地域住民が主体となって取り組む農泊事業の実践が、来訪者、地域住民、地域共同体にもたらす社会的効果について考察した。デシとライアンが提唱する「自己決定理論」においては「内発的動機付け」が促進されるためには「自律性」、「有能感」、「関係性」という欲求が満たされることが重要であるとされる。この理論を参照して、地域住民が、自らの意思で、個人の能力を活かして、仲間と共に、地域おこしの活動に取り組むことの意義について検討した。調査の結果から、地域住民が主体的に農泊事業に取り組むことで、地域共同体の活性化などの社会的効果をもたらされたことが明らかになった。

氏名：長尾 祐樹

題目：地方自治体における新たなスポーツ政策ネットワークの考察

—「ジャパンスポーツネットワーク」の活用を視点に—

梗概：本論は、地方自治体が抱える様々な問題の解決に資するスポーツ政策を、独立行政法人日本スポーツ振興センター（以下、JSC）の事業である「ジャパンスポーツネットワーク」（以下、JSN）を拠点とした新たなネットワーク形成から考察するものである。スポーツは地域活性化に一定の効果をもたらすものであるが、トップダウン型の政策展開がなされているために、その効果は低下している。この中央地方関係における問題解決のために、JSCの一事業であるJSNを組織化し、中央地方間の仲立ちとなる組織とすることを提言する。この提言

が実現することで、地方自治体や住民のスポーツ政策に関するニーズを管理組織であるJSNを介して国レベルの組織に伝達することが可能である。

氏名：沼尻 直美

題目：絵本の汎用性を活かした大学図書館の利用活性化

梗概：従来、大学図書館における絵本の所蔵目的は教育課程での教材としての利用に限定されていた。しかし近年、絵本は幼少期の情操教育に役立つという概念を越え、成人期・老年期での活動やメンタルサポートなど、幅広い世代に利用されつつある。本稿では、現在の大学図書館において、絵本の所蔵率の実態調査を全国的に行い、その利用目的等を確認した。調査の結果、全国の私立大学図書館では、434校中373校（85.9%）が絵本を所蔵しており、その利用目的も、教育課程での教材のみならず、専門教育での利用や学生の課外活動、英語・多言語学習支援、地域・社会連携、学生への情操教育、留学生支援、大学の広報活動への貢献など多様であった。一方で、絵本の選書方針があまり進歩していないことや大学間での絵本運用に関する情報交換がほとんど行われていないことも明らかとなった。本論文では、これらの現状と問題点をもとに図書館の利用活性化について検討した。

氏名：阪田 美枝

題目：紙漉き唄と酒造り唄の分類体系の構築と適用

梗概：廃れ逝く日本の仕事唄、中でも「紙漉き唄」と「酒造り唄」について、50年に亘り職務の傍ら全国を廻り、歌詞と音源を収集、著書『日本の紙漉き唄』（1992年）と『定本日本の酒造り唄』（1999年）にまとめた。論文は収集、収録された歌詞や音源をデジタルアーカイブ化して後世万人に検索利用されるためには、分類体系を構築する必要があり、検討した結果、多次元・合成型のファセット分類方式を採用した。膨大な歌詞の分類はおそらくこれが初めての試みであろう。唄が歌われた紙漉き、酒造りの仕事の内容解説、時代背景、文化的考察も試みた。録音、録画も資料として整理されているが、音源検索などは課題として残された。

氏 名：桑珠 措姆

題 目：チベットのラサ市における持続可能な
観光振興

―住民意識の醸成と政策の策定を求め―

梗 概：本研究は、観光産業が地域社会の活性化に良い影響を与える同時に、観光公害など負の影響も及ぼしていることを背景の元で、チベットに起きている観光公害に着目し、それに対する解決政策を検討した。研究の目的は観光が及ぼす地域への正・負の影響に関してチベット住民が認識すること、そして地域が有している地域資源に対して魅力を感じ、自律性をもってまちづくりに参加する必要があることを示し、教育を通じて地域まちづくりの活動に参加する意識を醸成することである。研究手法は質的研究を行った。結論は地域まちづくりにおいて教育は有効であることが明らかになった。

氏 名：佐藤 美奈子

題 目：きもの文化を持続可能にする紐帯の実
証的研究

―きもの多様性に見る伝統と革新―

梗 概：本研究は、「きもの多様性」に着目してきもの文化の持続性を理論と実践から考察したものである。歴史をさかのぼって抽出したきもの特徴は、現代のエコロジーの概念を含むこと、そして、社会の変化を受け入れる柔軟性と多様性をもった文化を醸成してきたことがわかった。さらには、きものがもつ本来の特性と現代多くの人々が抱く伝統とギャップがあることが推察された。そこで、社会実験では、きもの対する強い紐帯と弱い紐帯の層との比較を行いながら、このギャップを埋める方法を検討してきた。弱い紐帯の層がもつきもの多様性を社会が受容する社会変革を推進することで、きもの文化の理解と持続につながることを明らかにした。

氏 名：佐藤 良樹

題 目：ギリシャ議会政治の変容と隘路

―バルカン戦争から希土戦争にいたる
ヴェネゼロスの政治指導の展開―

梗 概：本研究は、ギリシャの政治変動を扱ったものである。ギリシャでは、1909年のクーデター以降、政治家ヴェネゼロスによって自由主義的改革が行われた。それにもかかわら

ず、再び1922年にクーデターが発生することになった。一方で、この時期のギリシャは領域拡大のイデオロギー、すなわち「失地回復主義」にもとづいてバルカン戦争、第一次世界大戦、そして希土戦争を経験した。本研究では、失地回復主義の推進による国土の拡大と国内の政治的不安定性とのギャップの中で、アクターの行動およびアクター間の相互関係がどのように変化し、議会政治に影響を及ぼしたのかについて分析を行なった。

氏 名：田鹿 晴香

題 目：若者の街づくりへの参加とその要因

梗 概：本研究は若者のまちづくりへの参加の要因を明らかにするために、政治的有効性感覚、組織加入、政策等への関心と認識に着目した。同志社大学の学生を対象としたアンケート調査を計量分析した結果明らかになったことは、政策等への関心や認識が高いと参加意向が高まることである。事例調査では、実際に若者が参加するまちづくり等に関する事業を実施している行政の担当者に、特に政治的有効性感覚を高める要因に着目したアンケート調査を実施した。その結果、政治的有効性感覚を高めると考えられる、若者の意見を政策等に強く反映している事業は、そうでない事業よりも事業の運営事体に若者が深く関与していることが分かった。かつこのような事業は、運営にあたって若者が役割を獲得しやすいような、組織的な活動が実施されていたため、組織化も政治的有効性感覚を高める要因であることが示唆された。

氏 名：矢尾田 修平

題 目：政軍関係における「民主的統制」

―その普及と機能上の限界―

梗 概：民主主義国家の政軍関係においては、軍に対する民主的統制(シビリアン・コントロール)が重要視され、また、それは特にポスト冷戦期において民主化過程にある国家へと普及していった。しかし、軍に対する民主的統制(シビリアン・コントロール)は、政軍関係に関するあらゆる状況で適切に機能するわけではなく、むしろ政軍関係を悪化させることもあるのである。本論文は、軍に対する民主的統制(シビリアン・コントロール)の重要性について先行研究を踏まえて確認しつつ、その機能上の限

界について、事例を提示しながら明らかにするものである。

氏 名：吉本 恭子

題 目：育児ハラスメントが起こる組織の現状と課題

梗 概：本稿では、「在職中の妊娠・出産に関する調査、2016」データを利用して、妊娠時に仕事をしており、過去 10 年以内に出産した全国 3000 名のうち育児休業を取得した人を対象にし、どのような組織で、育児期のハラスメントが起こりやすいかに関する実証分析を行った。

ハラスメントが起こる組織と起こらない組織の特徴を比較し、環境要因を特定し差異が確認された。また、育児期に被害が起こる組織は、妊娠期にも被害が起きており、ハラスメントが連鎖されていることが明らかになった。分析結果から、組織が環境改善だけでなく必要な人材育成をすることで、ハラスメントを防ぐ可能性が示唆された。